

研究ノート

「文章表現技術」の理論確立に向けて

高 松 正 毅

Toward the Establishment of a Theory of Writing Techniques

Masaki TAKAMATSU

大学で文章表現の授業を担当し、その実践を根底から支える理論の必要性を強く認識するに至った。本稿では、教科書、小中高における国語教育、さらにはこれら二つの担い手の持つ問題点を指摘し、今後自らが進むべき方向を模索する。

1. 良い教科書がないのにはわけがある

現在、大学で文章表現（科目名は「文章表現 ・ 」 「論文作法 ・ 」）の授業を担当している。授業を展開するにあたり、学生の文章による表現能力（ただし母語である日本語）を向上させる有効な教科書を自分なりに渉猟してみた。そしてこれは現在も探索中だが、見出すことはできていない¹。この事にはいくつかの理由が考えられよう。

その第一は、「教科書」という形態による制約のためである。

まず、私の実感としても、言語能力の向上には単純な反復練習をどうしても避けることができないと思う。ところが、それをそのまま教科書に盛り込もうとすると、第一章から最終章まで似たり寄ったりの内容を繰り返すことになってしまう。しかしそれが「教科書」であると、そういうわけにも行かないだろう。勢い行き着くところは、手紙の書き方、ビジネス文書、Eメール、敬語や漢字の使い方、……などなど、総花的な構成になる。ところが、このような形で毎時間違ったことをしたのは、「文章とはこういったものです」程度の外観をつかむことで終わってしまい、表現能力の着実な向上には結びつかないものと思われる。

次に、階段化の困難さである。文章を書くことを、ごくごく簡単な初歩から始め、次第に複雑なことにまで押し上げ、着実な上達に導くようなシステムを、一つのコースとして具現化し提示することが極めて困難なのだ。

大学での通常の講義は、半期なら15週、通年なら30週で組まれている。その期間・回数をひとまとまりの単位として、授業は成り立つものでなければならない。“10 Steps in Writing the Research Paper”(Barron's Educational Series, Inc.)など、階梯化を意識した書物もないわけではない。しかし、文章を書く能力は多分に総合的な能力である。幾つかの局面、ステップに分けること、またそのように分けて「文章」を分析することはある程度可能だろうが、書くという行為は、実際には一連の作業として行われるものであり、どこか一つの部分(情報収集やノート取り)だけがうまくこなせても、最終的に良い文章が出来上がるとは限らない。

また文章には、エッセイや小説、評論や論文などの種別はあらかじめあっても、簡単な文章と複雑な文章の区別を、書く以前にしておくことは難しい。一般に文章が平易だ、難解だなどと言われるのは、すでに書かれたものを読む際の理解に関してである。すなわち、高度な文章とは書かれている内容が高度であることに他ならない。従って段階を踏んで少しずつ複雑な書き方(形式・構成)に変えていくといったピアノのバイエルのようなわけには行かないことになる。

第二に、これが最大の問題なのだが、執筆者の力量である。「国語表現」や「日本語表現」と題される教科書のほとんどを、国文学者が国語学者が執筆している。大学教科書の出版社は日本文学や日本語が専門なら、これら教科書が書ける、または最適任だと思込んでいるらしい。しかし、その結果は明らかに芳しくない。なぜか。

文学の専門家は文学作品をその研究対象の中心に置き、作品の解釈・分析・評釈を行う。これは言語学の用語を当てはめるなら、作品を「解析」していることになる。しかし文章表現の授業で行わなければならないのは、文章を読解することではなく、自らが書くことである。これは言語学の用語を当てはめれば、文章を「生成」するということになる。

この「解析」と「生成」とは、単なる逆の操作ではない。つまり、解析で得られた知見を単に逆転させ適用しても、文章は生成されない。もし、これが至極簡単なものであるならば、優れた文学研究者が、優れた作家になってしかるべきだと思われる。ところが優れた文学研究を行い、かつ同時に優れた文学作品も書いている学者というのは寡聞にして知らない。文学作品の評釈・評論がどれほど巧みに出来たとしても、文学作品を生み出すことは出来ないのである。すでに存在するものを研究するのと、今までなかったものを新たに作り出すのでは、天と地ほどの開きがあるということだ。小説家に論文が書けないのと同じように、どれほど小説を研究しても学者に小説は書けないのである。「いかに読むか」と「いかに書くか」は即座には結びつかない。従って、優れた文章を選び、その文章がどうしてもどのように優れているのかを研究する「書くための文章研究」が、独立して別個に必要となる。

国語学者もしかりである。彼らは日本語そのものを研究の素材として、日本語の成り立ちや仕組みを研究している。だから自らの専門である音韻や文法、漢字や方言等々には詳しいのであろう。しかし文章をどう書いたら良いかに詳しいとは限らない。樺島忠夫氏や安本美典氏の著作が価値を有するのは、彼らが「文章」をその研究対象としているからに他ならない。専門を違えながら、今

思いついたように片手間にやれるような類のものではないことを、文章表現関連教科書の執筆者は深く自覚すべきである。

国文学者も、国語学者も、責任をもって意見を述べる事が出来るのは自らの専門領域だけである。書く文章の種類でいうなら論文だけである。彼らが自ら実践しているのはその領域だけなのだから。それでは、彼らの書いた文章を試みに読んでみるが良い。もし、ある本を教科書として選ぶとするなら、その著者の書いた論文を読んでみることだ。もし文章が少しも上手いと思えないようなら、著者自身が真に文章の書き方を修得しているとは言い難いことになる。多くの学者や先生が、書かせても話させても、くどくどと長く時に難解で「下の下」という評価は妥当なものではないだろうか。そんな人物から一体何が学べるというのか。

教科書ではなく、理論書を見回してみても、文章表現に関する著作では、自ら実践している方々の方が、はるかに価値の高いものを書いている。まず作家が書いた文章読本³がある。その他、新聞記者⁴やコピーライター⁵が書いたものがある。また公務員⁶が書いたものがある。大学の教員⁷が書いたものとしては、なぜか他分野の研究者が書いたものに良いものがある。

一般にプロゴルファーを、人に教えることで生計を立てるレッスンプロと、試合に出て賞金を稼ぐことで生計を立てるトーナメントプロとに分けるが、どうやら文章は、実際に現場で自ら苦しんだ経験を持つ人（＝トーナメントプロ）の方が、知見もはるかに有用なようである。もちろん「名選手、かならずしも名監督ならず。」ということも言えるのであろうか。

2．小中高の国語教育では大学や社会で必要とされる文章表現能力は向上しない

ここでいったん大学の現場に目を戻そう。大学における学習で書くことが要求される文章は、「レポート」と「論文」であり、英語では Term Paper, Research Paper や Thesis などと呼ばれ、Academic Writing に分類されるものである。さらに就職後、現実のビジネスシーンで必要とされる文書は、届出・通知、報告書、企画書、稟議書、等々である。小学生や中学生のように、遠足や運動会の「行事作文」が要求されることもなければ、「読書感想文」が要求されることもない。

このズレはまた、国文学者が教科書執筆者として不適任な理由に重なってくる。我々が大学教育で必要としているのは、エッセイや小説や詩を書く能力ではない。にもかかわらず、中高の国語の先生は、大学の文学部や教育学部で文学を専攻した人がほとんどである。そして、国語の教科書を作っている大学の先生もまた文学が専門の研究者である。

今日の国語教育の問題点は指摘し始めたらきりがないが、こういう状態であるからこそ、樺島忠夫氏が指摘するように、文章を評価する基準が、豊かな文学性や含蓄、奥深い味わい、余韻や余情といった極めて曖昧な情緒的感覚的なものとされ、明快で分かりやすい文章よりは、かえって難解なものの方を珍重し続けてきた奇妙な伝統を定着させたのである⁸。これは日本特有の「情」の美の世界であり、学問やビジネスで必要とされる「論理」とは相容れないものである。Joseph M.

Williamsは、その著“ Style, Toward Clarity and Grace ”と“ Style, Ten Lessons in Clarity and Grace ”でClarity とGraceの二つを、文章が兼ね備えるべき美德として設定している。これは「明快さ・明晰さ」⁹と「気品・格調」ということである。この「気品・格調」は、余韻や含蓄といったものとは異質のものだ。

もちろん国語の教材は文学ばかりでなく、意見文や評論文も扱わないことはない。しかし、これは香西秀信氏がするどく指摘しているとおり¹⁰、国語教育における意見文というのは誰も反対しないような当たり前のことを臆面もなく書かせる類のものなのだ。「先生（大人）が喜ぶ内容」というものがあらかじめあって、生徒達はそれに合わせて褒めてもらうことばかりに心を砕くのである。その結果、ウソを上手に書くということにもなる¹¹。

公に「意見を述べる」ということが、どれほど覚悟がいることが、全く理解されていない。あえて何かを述べる、何かを書くということは、そのことが自分にとってどうしても述べずにはいられない切実な問題でなければならない、という簡単なセオリーさえわかっていない。少なくとも通常の授業では、特に書きたくもないものを書くくせは、絶対につけてはならない。

つまり、文章指導にあたっては「仕込み」が重要となる。どうしても書きたくなるようにし向けなければならない。言い換えるなら「追い込む」あるいは「つきつける」と言ってもよい。ただし、その書きたくなるモチベーションは、国語の先生がよく口にする「感動」などでは決してない¹²。そういうこともあるのかもしれないが、極めて稀であろう。書くという行為は、たとえば疑問や違和感といったものから出発し、それが「怒り」や「哀しみ」にまで昇華したとき、初めて可能となるものだ。それがどのような問題であろうと、語る資格があるのは、先ず当事者（被害者）である。次にはその問題に、仕事あるいは仕事に準じる形で積極的意識的に関わっている人、すなわち担当部署で働く人や専門家である。学生や生徒であっても、学校の研究課題などで現場に触れ深く調べるなどして初めて意見を述べる位置に立つことが出来るのだ。

さらに文章表現では、文学からのものとして例えば「起承転結」が良く持ち出される。これがまた困った代物なのである。「起承転結」が文章を書く上で使いものにならないことを指摘したのは波多野完治氏¹³が早いかと思うが、明確に示したのは澤田昭夫氏¹⁴である。

ここでは詳細は省くが、「起承転結」は漢詩（絶句）の構成法の一つであって、それ以上のものではない。文学である絶句の詩作には有効かもしれないが、全ての文章表現に当てはめることはできない。特に問題なのは「転」の部分である。私はこの部分を、「結」に落とすため緊張を和らげそらす部分として「抜き」あるいは「すかし」と呼んでいるが、意見文は一貫性を保持し、各部分が有機的に結合し、緊密な統合体を形成してこそ強靱なものになる。「転」の部分で文章の本筋とは一見関係の薄い「抜き」を入れることは絶対にしてはならないことである。

「起承転結」とは、「序論・本論・結論」や「序・破・急」が三部構成であることを示すのと同程度の、単に四部構成であることを意味する以上のものではない。どれ程「構成」に腐心したところで、それだけでは優れた文章になどならないのである。起承展結ならまだしも、起承転結ではダメ

である¹⁵。「文章は『起承転結』で書け¹⁶」と書いてあったら、その本は全く使い物にならない。即座に捨てるべきだ。その書の著者は勉強不足も甚だしいと断じてよい。

これまで国語教育における成果を参考にしようと懸命に探して来たのだが、残念ながらほとんど使いものになるものがないのには唖然とする思いである。ようやく見つけられたのが、岩田道雄氏（岩田氏は「読書感想文」を否定し「鑑賞批評文」と呼ぶ。）香西秀信氏も引用する野口芳宏氏（数々の著作の全てが読むに値するといっても過言でない。）中村敦雄氏、三森ゆりか氏。このくらいしかあげることができない。

この点、大学受験用の参考書や問題集の方がはるかに上質である。一つの文章には一つのことしか書かれないということを明言したのは出口汪氏¹⁷である。この程度のことですら、国語教育の現場では明確に認識されていないのが現実であろう。

3. 文章指導は目的的に、指導内容を明確に絞るべきである。

さて大学生の文章力に関して、安本美典氏は「書きたい文章を書かせれば、それなりの文章を書くのだ。（p.20）」「彼らには文章力はある、ただ、むかしの人のような「文体」で書けないだけだ、という感じがしている。（p.14）」¹⁸と述べているが、この認識は私の認識とは微妙なズレがある。確かに、面白くて笑える「軽いノリ」の文章なら大学生の中にも巧みに書く者がいることは事実である。ところが、明快な主張を持ち、その主張を支える根拠がきちんと示された、すなわち確実に論証された文章が書ける学生は絶無と言ってよい。「自らの意見・見解を述べる」という段になるとからっきしだめなのだ。この点に関しては、「これは彼女らの国語力、文章表現力の不足によるというよりも、反論の文章を書いたことがないという理由によるところが大きい。エッセイのようなものを書かせると、それなりにまとまった文章を書いてくるからだ。」¹⁹とする香西秀信氏の認識の方が正確である。どういうわけか、日本では高等学校までの教育で自己の考えを公に主張するという訓練を口頭でも文書でもほとんど無視している。だから出来なくて当然なのである。

最近、若者のコミュニケーション能力が落ちてきていると指摘される。しかし、携帯電話やメールを使いこなし、授業中でさえおしゃべりに夢中なのだ。ところが、就職活動をする段になると自己紹介すら満足にできない。彼らは非常に狭い仲間内のみ通じる日常的な事柄ならば自在に操れるのだ。ところがひとたび自分とはなじみの薄い事柄、自分とは異質な相手に堂々と語らねばならない状況に立たされると沈黙してしまう。

我々教員が指導しなければならないのは、指導なしにはなかなか上達し難いものであるべきだ。放っておいてもできることを、あえて指導する必要などない。このような考え方に立って、指導内容は明確に意識化設定されるべきである。もとより話す訓練は必要なのだが、それはおしゃべりの練習ではない。聞く訓練は、友達のおしゃべりが聞ける能力ではなく、授業が聞ける能力を伸ばすものでなければならない。岩田道雄氏が「私たちの作文教育の特長は、つねに子どもの認識の発達

と結びつけていくことと、説明・意見文を重視することです。」²⁰と述べているとおり、大学における作文教育もまた、説明文、意見文に重点を置くべきだと私は考える。以上のことから大学で指導すべき中心は、レポート・論文の書き方、そして説明文・意見文の書き方ということになるだろう。

また、求められる能力は時代によっても変わっていく。今となっては何の役にも立たない「生活綴方」も、その当時としては、それなりの役割を果たしたのであろう。グローバルやボーダーレスといったことばで国際化社会が喧伝される今日、この点は英語の教科書の方が先行している感がある²¹。しかしこれには疑問を禁じ得ない。母語である日本語でやってみたことがないことを、いきなり英語でできるであろうか。まずは日本語できちんと意見が述べられるような指導が必須であると思われる。

4. 文章（言語）の二つの側面

文章は、二つの側面に分けて考えることができる。一つは意味「内容」であり、もう一つは表現「形式」である。このことは、すでに樺島氏の『文章構成法』に明確に見える²²し、板坂元氏の『何を書くか、どう書くか』（光文社カッパブックス）などは、このことをそのまま書名にしたものである。尾川正二氏『文章のかたちとところ』（ちくま学芸文庫）の腰巻きにも「何をいかに書くか？」とある。したがって、このことは言語学や意味論を学んでいなくとも、すでに周知の事実として扱って良いことだと思われる。（しかし、この「内容」と「形式」の二分類は観念的な分け方であって、実際には不可分のものであることには注意すべきである。）

文章を書くという行為は、意味「内容」を構築し、表現することでその意味に「形式」を与えることだ。教科書の持つ問題点はすでに述べたが、指導が真に難しい理由はここにある。我々が実際に添削できるのは、せいぜい用字や「てにをは」レベルの文章の外形に過ぎない。ところが本当に指導を行わなければならないのは「内容」の方なのである。そもそも分量が少なすぎたり、あるいは発想・思考そのものが貧弱すぎたりすると、書かれていないものを勝手に加える訳にはいかないため、もはや指導のしようがない。

俗に「文は人なり」と言われる。これは文章にその人の人格や性格、人となりが見れるという意味ではない。そういうこともあるのかもしれないが、文章に実際に現れるのは、その人が何を考えているかである。普段からどのようなことを、どの程度の深さで考えているのかが現れる²³。

逆に言えば、普段ろくに考えてもいないことを、いざ書く段になって急に思いついたように書いてみたところで良い文章は書けない。これは絶対である。そんなことをしても口先だけのきれいな事を並べ立てるだけの内容の薄い文章にしかならない。対象を、観念としてではなく、実感として捉えられているかどうか、その文章を支える力となる。人は自分の身の丈に合った文章しか書けない。つまらない（＝価値の低い）文章というものは、いくら外形や構成が整っているように見えても、中味のない文章である。

だから、書くためには広く深く考えなければならない。つまり、書けないのは考えないからである。そして、考えられないのは無知だからだ。知識のないところに思考は生じ得ない。知識があれば必ず思考が生じるというわけではないが、知識を伴わない思考は存在しない。

5. 今後進むべき方向

以上述べたように、文章を書くという行為は、どうしても「思考」に行き着くようだ。板坂元『考える技術・書く技術』（講談社現代新書）、西研・森下育彦『「考える」ための小論文』（ちくま新書）等々、この点を意識した著作もいくつか見られる。そして言語表現を行う際の思考は、当然のことながら言語を用いてなされる。したがって、書くということは思考することであると言っても良い。

「文書作成法についての大変すぐれた研究（例えば、Flower 1979²⁴とFlower and Hayes 1981²⁵を参照）は、書く過程を分析して、書くことは考えることの一つの形態であると結論づけています²⁶。もしこれが本当なら、書く人のためによく言われる、まず自分の考えを明確にして、それからその考えを明確に述べるようにしなさい、という助言が誤りであったこととなります。²⁷」

文章を書くための思考法というものが特に独立して別個に存在するのではない。書くという行為そのものが思考行為だというのである。

そして現段階では、文章を書く訓練法または教科書・自習書としての一つの解答は、宇佐美寛氏の『新版論理的思考 論説文の読み書きにおいて』（メジカルフレンド社）と香西秀信氏の『反論の技術 その意義と訓練方法』（明治図書出版）であると、私は考えている。単に論理的思考の訓練に限れば、野矢茂樹氏の『論理トレーニング』²⁸（産業図書、後に『論理トレーニング101題』も出た。）が、これに当たるだろう。

思考技術、問題解決と意思決定の手法、情報の収集法とその整理の仕方・まとめ上げ方には、ブレインストーミング、川喜多二郎氏の考案したKJ法、中山正和氏の考案したNM法、ケプナー・トリゴー法、など、すでに様々な方法が数多くある。これらの中に、文章を書く上で参考にするべき手法があると思われる。また最近、ビジネスの現場で大流行の「クリティカル・シンキング」の手法も参考にするべきものだろう。

優れた文章を書くためには、何よりもまず、「優れた文章とはいかなるものか」が明確に意識化される必要もある。

私は今後、文章を書くための文章研究を行って行きたいと考えている。そして作文理論に有用な研究成果を幅広く探索検討し、研究を深めて行きたい。それらを総合し、最終的にはこの方向で、文章表現の本を書くことを企図している。樺島氏がその著の冒頭に、「もう文章の書き方を述べる書物の出版は不必要ではないか」と書いたのが昭和55年のことであるにもかかわらずである。仮の

書名は『どの本にも書いてある「文章表現法」』。どの本を見ても書いてあるのなら、なおさら書く必要などないではないかと言われそうだが、すでに多くの書物に見えている「具体的に書け」一つを取ってみても、ほとんどの人が理解していない。文章を書かせると、多くの人が事柄を羅列して漠然と散漫に書いてしまうが、「あらゆること、いかなること、どんなことでも、何にでも、……、」²⁹を使ってしまう。ちょっと考えればすぐにわかりそうな絶対にしてはならないことを、極めて高い確率でやってしまう。

これは一体なぜなのか。この理由を考え、原因を明らかにし、適切な処方箋を書かねばならない。まずは自らの作文理論を確立したい。

(たかまつ まさき・本学経済学部助教授)

註

- 1 教科書として使えるかどうかはわからないが、論文の形式に限れば良質な参考書は存在する。齋藤孝(1998)『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部を筆頭にあげたい。最近でも、山内志朗(2001)『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書、小笠原喜康(2002)『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書など、この種の本は今後も出版され続けて行くことだろう。
- 2 ちなみに本書の内容は、STEP 1 Find a Subject STEP 2 Read a General Article STEP 3 Formulate a Temporary Thesis STEP 4 Prepare the Preliminary Bibliography STEP 5 Take Notes from Relevant Sources STEP 6 Label Notecards and Revise Working Outline STEP 7 Write the First Draft STEP 8 Revise the Text; Write Introduction and Conclusion STEP 9 Fill in Parenthetical References or Footnotes on Draft STEP 10 Put the Paper in Final Formである。また註26も参照のこと。
- 3 文章読本に関しては、斎藤美奈子(2002)『文章読本さん江』筑摩書房というとても面白い本がある。
- 4 辰濃和男(1994)『文章の書き方』岩波新書、大隈秀夫(1997)『実例文章教室』日本エディタースクール出版部、など。
- 5 前田巍(1999)『文章の勉強』大修館書店、田村仁(2001)『文章上達トレーニング』大和出版、など。
- 6 今井盛章(1980)『文章起案の技術』学陽書房 この書は現在絶版となっているのが惜しい本である。
- 7 木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中公新書は夙に有名である。
- 8 樺島忠夫(1999)『文章表現法』角川選書 pp.25-27「日本人の文章観」他。
- 9 この「明快さ・明晰さ」は「分かりやすさ」につながる。文章の分かりやすさの研究は認知心理学などの成果にも期待したい。
- 10 香西秀信(1995)『反論の技術 その意義と訓練方法』明治図書出版 p.24
- 11 日本作文の会編「作文と教育」2001年5月号臨時増刊号「子どもが『ウソ』を書くとき」百合出版
- 12 樺島忠夫(1980)『文章構成法』講談社現代新書 p.12、また注8他。
- 13 波多野完治(1973)『現代レトリック』大日本図書、他。
- 14 澤田昭夫(1977)『論文の書き方』、同(1983)『論文のレトリック』講談社学術文庫
- 15 全否定はしないまでも、「起承転結」にとらわれてはいけないことを述べる書物は極めて多い。大隈秀夫(1984)『文章の実習』日本エディタースクール出版部では「起承転結にこだわらないこと」として一章を立てている。宮部修(2000)『文章をダメにする三つの条件』丸善ライブラリー、山口文憲(2001)『読ませる技術』マガジンハウスなどにも同趣旨の記述が見える。
- 16 書く際には使えない「起承転結」も、書かれた文章を分析する際には極めて有効なもののように感じられるかもしれない。それは「起承転結」の定義づけが曖昧なためであり、四部構成で書かれた文章は全て「起承転結」に当てはまるように感じられてしまうからである。
- 17 出口汪(1998)『きのうと違う自分になりたい』中経出版(なお同(2001)『カリスマ受験講師の論理的に考える、私の方法』知的生きかた文庫(三笠書房)はこの書を文庫化したもの。)他。
- 18 安本美典(2001)『説得の文章術』宝島社文庫 この書は波多野完治の衣鉢を継ぎ文章心理学を修めた安本の一つの到達点である。シャーマンの文学分析論を土台に統計数理的な見地から見た「読みやすい

- 文」の外形的特徴はこの書に尽きていると思う。1999年に宝島社新書として発行されたものの改訂版であるが、実は1983年の『説得の文章技術』講談社現代新書685が本体である。何としても絶版にはしたくなかったのであろう。
- 19 香西秀信(1995)『反論の技術 その意義と訓練方法』明治図書出版 p.112.
 - 20 岩田道雄(2002)『最新中学国語の授業・作文』民衆社 p.196.
 - 21 例えば、大学用英語教科書JASET教材開発研究グループ“Controversial Issues, Write Your Opinion at Your Own Risk”朝日出版社、“Which side are you on? Forming views and opinions”成美堂などがある。
 - 22 「文書を書くためにまず必要なのは、書くことを発見し、価値ある内容を作りあげる技術である。どのようにして書くべき問題(題材)を発見するかを明らかにしなければならない。かくべき題材が見つかったら、価値ある内容を作りあげるにはどうするかが問題になる。」同書p.12
 - 23 単なる現象としては「でも、けど、とか、けっこう、自分的には、……」など、筆者が日常頻用する話し言葉が書き言葉に影響する「干渉」と呼ばれる問題もある。また、「だ・である体」で書いていながら、自分の思いを述べる時になると急に「です・ます体」になるという現象も顕著に見られる。
 - 24 原注：Writer-Based Prose: A Cognitive Basis for Problems in Writing. College English 41 (September):19-37.
 - 25 原注：A Cognitive Process Theory of Writing. College Composition and Communication 32 (December):365-387
 - 26 なお Flower, Linda には“Problem Solving Strategies for Writing”(Harcourt Brace Jovanovich, Inc.)の著作もある。この書は、‘Steps and Strategies for the Composing Process’として、STEP 1 EXPLORE the Rhetorical Problem STEP 2 MAKE a Plan STEP 3 GENERATE New Ideas STEP 4 ORGANIZE Your Ideas STEP 5 KNOW the Needs of Your Reader STEP 6 TRANSFORM Writer-Based Prose into Reader-Based Prose STEP 7 REVIEW Your Paper and Your Purpose STEP 8 TEST and EDIT Your Writing STEP 9 EDIT for Connections and Coherence の9ステップをあげ、それぞれ2～4のストラテジーを詳述している。註2と合わせて参看されたい。
 - 27 ハワード・S・ベッカー/佐野敏行訳(1996)『論文の技法』講談社学術文庫p.6.
 - 28 ただし、この書は一度高崎経済大学で教科書として使ってみたが、私の力量もあり、上手く行かなかった。今は授業で問題のみを抜粋して使っている。この書の内容を学ぶ意義や価値が理解されなかったか、あるいは内容があまりに高度過ぎたか、誰一人と言っていないほどついでにこなかったのである。
 - 29 私はこれらを「漢化語」「漢化表現」と呼んでいる。これらは具体性を消失させ内容を漠然とさせる効果を持つ。「何事にも真剣に取り組み、いかなることにでも責任を持ってあたり、どんなことでも最後までやり通し、誰にでも優しく接することができるのが、私の特長です。」のように自己PRの際に頻用される。なおこれは、敬語などで用いられる「臍化表現」(「この人」を「こちらの方」と言ったりする言い方)とは関係ない。